

アクティブ・ラーニングの一方策

～討論のある問題解決的な学習による子どもが社会参加する総合的な学習の時間～

長谷川 寛

1 はじめに

文部科学省は、2020年から小学校、2021年から中学校、2022年から高等学校の次期指導要領を実施する予定である。今回の改訂では、今までのように何を学ぶか指導内容の見直しだけでなく、教育方法としてどう学ぶか、すなわちアクティブ・ラーニング（以後AL）を強く打ち出している。

なぜALが必要なのか、教師と子どもの2つの視点で教育現場を見てみると、

教師の視点では、教師の多忙化が叫ばれている。それは最近団塊の世代の大量退職に伴い、若手教師が増え、熟年教師のノウハウが若手教師に伝承されなかったことも原因の一つと思われる。しかしもっとも深刻なのは、若手教師は毎日の業務に追われ、教科書どおりに授業を進めることしかできず、ほとんどの場合、いわゆる「教科書で教える授業」を行っているということである。

そのことは総合的な学習の時間がもっともALを行いやすい学習であるにもかかわらず、総合的な学習の時間を組める、もしくは独自に教材を開発し単元計画を立てることができる教師が少なくなっているということでもある。このことは他の教科においても同じことが言える。

しかし、本来ALは授業実践をしっかり行ってきた教師には、当たり前のことであって、今まで自分が実践してきたり、目指してきたりし

たことと大きく変わらないのである。

そこで文部科学省も2020年から大学入試改革を行ったり、論点整理で学び改善の視点として「主体的な学び」「深い学び」「対話のある学び」を挙げたりして学びの変換を目指しているが、現場に浸透するにはまだ時間がかかると思われる。

子どもの視点からはどうだろうか。現代の子どもたちはいわゆる良い子が多く、TVのインタビュー等でも「そんなことまで言えるのか」と感心するほど大人的発言をしてびっくりさせられることがある。しかし、自己肯定感や自己有用感、そして自制心や規範意識が低く、人間関係の希薄化も進んでいる。さらには自分さえ良ければ良いという私事化傾向が顕著に見られるという調査結果もある。

このような将来を担う子どもたちには、葛藤があり、達成感があり、子どもたちが自分たちで創ったと実感を伴う子ども主体の授業を行う必要がある。

またそのためには、子どもたちの目が輝き、学級全員が参加し、子どもたちが社会をキョロキョロ観て様々な感じ、どうすれば今よりも少しでも良くなるのか問題解決するALとしての総合的な学習の時間を実践していく必要があると実感している。

本稿では、これらのことから今後の子どもたちのために「討論のある問題解決的な学習による子どもたちが社会参加する総合的な学習の時間」について問題解決的な学習の展開の仕方等

をもとにして総合的な学習の時間の展開について述べていきたい。そしてこれから教師を目指す学生が、ALの授業とはどのようなものなのかをイメージでき、より切実的・実感的な問題解決的な学習の展開をしていってほしいと思っている。

2 これからの時代に求められる人材像

まず、なぜALが必要なのか。そのためにはこれからの世の中がどうなっていくのか、どのような人材が必要なのかを冷静に捉える必要がある。

(1) 30年後の世界

2015年1月3日放送NHKのネクストワールドによると、人工知能やビッグデータによる未来予測が進む世界である。そして30年後には、人間の体内に入ったナノマシンが体内を動き回り、がん細胞を見つけると抗がん剤を発射し死滅させることができるため、人間の平均寿命が100歳ぐらいになるというのである。しかし日本の人口は今後明治維新の頃の人口まで減少すると言われている。犯罪も何時頃の地域に起こるかを予測したり、ヒット曲も作曲の段階で予測することができたりするようになる。さらに過去のデータから瞬時にもっとも良い方法を洗い出すことができる時代になってくる。このような社会では、現在ある多くの職業がなくなるとも言われている。しかしこのことによる新たな職業もまた発生してくるということでもある。このような時代の中で、人間は感情を豊かに働かせながら、どのように社会や自分の人生をより良いものにしていくか考え出すことが求められる。

また、「正解のない時代」でもある。どんなに新しいものを創り出しても人々はそれに満足せず、新しいものをほしがるのである。この言葉は社会が激しく変化し、常に新しい未知の課題に試行錯誤しながらも対応が求められる「知識基盤社会」と同義語であると考えている。

さらには、よりグローバルな時代になる。グローバル化が進んだ社会では、アイデアなどの知識そのものや人材の国際競争が加速し、製造業等の海外移転による国内雇用の変化をもたらすことになる。このような社会では自己の能力を発揮しながら社会に貢献する人を育てる必要がある。

(2) 目指す人材像

このような時代の中では、単なる知識は覚えなくても端末等から引き出すことができるようになる。そのため教えられた知識ではなく、社会で起きている様々なことに敏感に、そして共感的に感じる心をもって社会を観、自分で獲得した知識を身に付けることが重要になってくる。

またグローバルな社会のためにも、自分で獲得しながら常に更新された基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を見つけ、課題を解決し、新しいものを創り出す力が必要になる。そのためには思考力・判断力等が必要になり、社会を今よりも少しでも良くしようとする意識(=社会力)が求められている。

そして、日本人がもっとも不得意としてきた、自分自身の考えを主張できる表現力のある人材の育成が必要である。

さらに大事なこととしては、人口が減少する社会では今以上に人とのつながりが大きな意味をもってくることである。そのためには「人を育てる」ことである。知識・技能を教える以外に、良い人間関係を構築できる人間らしい人を育てることが教師の仕事になる。

まとめると、世の中で起こっている様々なことを受容的・共感的に受け止め、今ある社会を今よりも少しでも良くしようと感ずる心を持ち、自分で問題を発見し、それを解決するためにはどうしたら良いか考え、自分が良いと思ったことを実行しようとして表現したり、行動したりしながら、失敗してもまた立ちあがって前向きに行動できる人を目指して育てることが教育であると考えている。

3 指導要領改訂に伴うキーワード

このような将来の社会，日本を見据えて文部科学省は学習指導要領の改訂を行っているが，その際文部科学省がどのようなことを強調しているのか，確認しておく必要がある。このことは教師もしっかりおさえておく必要がある。

① アクティブ・ラーニング

ALとは，どのような学習のことか，文部科学省初等中等教育局視学官の田村学氏によると，「子どもたちの思考が活性化し，真剣に課題に立ち向かっているような状況」が授業の中で起きていることがALであると言っている。「特に子どもたちが授業中に活動する，何か体験をたくさんさせなければいけない学習であると誤解しないように」と述べている。

ALは，平成24年8月中央教育審議会答申では，「能動的学修」，そして平成26年11月の「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」では，「課題の発見と解決に向けて主体的・能動的に学ぶ学習」とされている。

② 社会に開かれた教育課程

各学校が，教育が普遍的に目指す根幹を堅持しながら，社会の変化を柔軟に受け入れて教育課程を編成した上で，教育課程全体を通してどのような資質・能力を，どのような学びで育てるのかを社会に明示し，社会と協働していくことを目指している。（論点整理）

③ 育成したい資質・能力の3本の柱

育成したい力として「生きて働く知識・技能の習得」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養」の3つを挙げている。（平成28年6月23日教育課程部会小学校部会資料1）

④ 主体的・対話的で深い学び

行う学びとしては，「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を挙げている。

（論点整理）

⑤ 基礎的・汎用的能力

基礎的・汎用的能力の具体的内容を「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つの能力に整理した。

（今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について）

⑥ 21世紀型能力

求められる能力として3つ挙げている。

○未来を創る（実践力）…生活や社会，環境の中に問題を見出し，多様な他者との関係を築きながら答えを導き，自分の人生と社会を切り拓き，健やかで豊かな社会を創る力

○深く考える力（思考力）…一人ひとりが自分の考えをもって他者と対話し，考えを比較吟味して統合し，より良い答えや知識を創り出す力，さらに次の問いを見つけ，学び続ける力

○道具や身体を使う（基礎力）…言語や数量，情報などの記号や自らの身体を用いて，世界を理解し，表現する力（資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究報告1）

4 今求められている学習

これらのことから考えたとき，今どのような学習が求められているのだろうか。

(1) 社会力のある人間を育てる学習

社会力，すなわちどうしたら社会や物が今よりも良くなるのか？

この意識を持たせることがもっとも大事な学習である。この意識がない限り前進しないからである。人間は常にこの問題を解決して発展してきた。そのためには，子どもたちが自ら社会の問題について追究し始めるようにしていきたい。そして今の社会や物を今よりも少しでも良くしようとする意識と実行力のある「社会力のある人」を育てることが重要であると考えている。

(2) 討論のある問題解決的な学習

○生きる力とは
 「生きる力」とは、「確かな学力」「豊かな人間性」「健康・体力」の知・徳・体のバランスのとれた力のことであり、「確かな学力」とは、基礎・基本を身に付け、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら学習し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力である。
 (文部科学省「すぐにわかる新しい指導要領のポイント」)

○総合的な学習の時間の目標
 横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、①自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、②学び方やものの考え方を身に付け(学習の仕方を身に付させる学習)、③問題の解決や探究活動に主体的、創造的、共同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができる。
 (学習指導要領)

この「生きる力」と「学習指導要領総合的な学習の時間の目標」を見ると、ほぼ同じ内容が書かれており、生きる力の育成のためには総合的な学習の時間が大きな役割をもっていることがわかる。そして総合的な学習の時間の目標は「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら学習し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成する」となっており、まさに問題解決的な学習のことである。

また論点整理にも「習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程」「他者との協議や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程」の実現が求められており、問題解決的な学習の展開が必須である。

これは、生活や社会に対してあまりにも無関心で私事化傾向にある最近の子どもたちに、社

会に関心を持ち、社会を観る力を付ける必要があるからである。そのためには、まず自分が追究すべき問題を見つけ出す力を付ける必要がある。そして問題を見つけ出したら、自分で知識や資料を集め、読み取り、整理しながら解決していける人間を育成する必要がある。

今後は、子どもたちがより切実的・実感的に問題を捉え、学級の子どもたち全員が自分の意見を発表したり、自己内対話を繰り返したり、友達の意見を聴いて取り入れたりしながら学習を進める「討論のある問題解決的な学習」を教師が組み、展開することが大事であると考えている。

討論では、まず個としての自分の思いや考えを持たせることが大事である。そのためにはじっくりノートで考えさせる時間を確保したい。自分の考えを持とうとするとき、子どもたちは自分の生活体験や知識、その他資料を読む等、根拠を出そうと自分の知力を最大限に生かし、自己内対話を繰り返す。最近はこの個の考えがないにも関わらず、むやみにペアやグループで話し合わせてしまう教師が多く見られる。まず個の考えを確実に持たせ、それを学級全体に発表し、討論する中で、問題を解決していくことが良いと考えている。討論のある問題解決的な学習の中で、子どもたちが自己内対話を繰り返すことは、田村学氏が述べた思考が活性している状態であると考えている。ということは討論のある問題解決的な学習は、ALであるということである。

個で考える、全体で討論する、そして最後にもう一度個に戻って振り返りを行わせたい。討論のある問題解決的な学習後には、必ずわかったこと、疑問に思ったこと等今日の感想を書かせたい。このことにより自分の考えをまとめることができ、言語能力も育成できるからである。言語能力は、発表や作文といった授業のときだけに育てるものではなく、日々の授業の中でも話したり、書いたりすることによって育てるものであると考えている。

また学級全体で討論する場合、問題に対して「自分はどう思うか」「なぜそう思うか」の理由も書かせることにより、討論が深まることが多い。「なぜ」を考えさせることで論理的に考えることができるようになって考えている。

討論のある問題解決的な学習に取り組んでいる学級では、学級全体の中で活発に自分の考えや思い・感想（情意的・シンキング）、そして客観的事実に基づいた意見（クリティカル・シンキング）を述べることによって様々な効果が現れてくる。

まず、答えを出すために思いや考えを発表するので、いわゆる勉強ができる子どもが活躍するだけでなく、普段の授業ではあまり活躍しないが休み時間や部活動等に活躍する子どもも生活体験や経験値を生かして発言するため、授業に参加することができる。すなわち学級全員が参加できる学習である。

また子どもたちは、友達の意見を受け入れたり自分の意見を主張したりしながら、お互いに教え合い、認め合い、励まし合うことによって、子ども同士の受容的・共感的な関係を築くことができる。そのため、子ども同士が深く理解し合うので仲が良く、学級が安心感のある居場所になり、一人ひとりが生き生きと活躍できる学級になっていくのである。

さらに、これらのことにより、子どもたちは、間違えを恐れずに一人ひとりが積極的に自分の思いや考えを発言することができるようになる。そして、さらに発展的な意見を創ろうと努力し、それを述べるようになるのである。また、答えを一つに絞ることができるので、学級内で考えを一般化できたり、力の強い人ではなく良い意見や考えを見つけて言える人が力のあるリーダーであるということに気付いたりすることができるのである。

討論のある問題解決的な学習を行うためには教師が授業の前に子どもたちが発問に対してどのような反応をするか、予測しておく必要がある。

同時に、どのような発問をすれば全員が考えや思いをもち討論が深まるか、発問の検討をしっかりと行うことが重要である。

若手教師はまだ児童・生徒理解が足りず、子どもの動きや反応を読むことが弱い。そのため授業で子どもたちが出した考えをそのまま受け入れるだけにとどまり、気づかせたり、さらに深い子どもたちの考えを引き出ししたりする発問ができないことが多く見られる。討論のある問題解決的な学習を展開することによって、子どもの反応を予測しながら、教師はより児童・生徒理解をしようと努力する教師になってほしい。そして子どもたちを信じる教師になってほしい。

しかし今まで観てきた多くの研究授業では、子どもたちを信じることができずに、授業前に講義型授業を行うか、討論のある問題解決的な学習を行うか迷い、子どもたちの反応への不安から講義型授業を展開することが多く見られた。ところが終わってみると、子どもたちは教師が考えた以上のことを考えたり、発言したりして、子どもたちの力、そして素晴らしさを改めて知ることが多く、討論のある問題解決的な学習を行えば良かったと反省する教師が多く見られた。

また、討論のある問題解決的な学習は、学力を向上させることもできると考えている。

学力向上のためには、知識・技能を教え、身に付けさせるだけではなく、子どもたちの学習意欲を高めることが最も効果的であると考えているからである。学習意欲が高まることによって、問題解決するために自分で知識や技能を獲得しようと努力する。すなわち知識は、自主的・積極的に学習していく中で獲得していくものでもあると考えている。

このように問題解決的な学習は、総合的な学習の時間だけではなく、社会科や国語、そして体育や音楽など、すべての教科において展開しなければならない重要な学習である。

ぜひ教師には、この討論のある問題解決的な

学習が組めるようになってほしい。また大学においても講義型しかイメージのない学生に、問題解決的な学習を体験させ、学生にしっかりとした問題解決的な学習のイメージをもたせることが重要であると感じている。

(3) 子どもたちが全員参加し、目を輝かせて取り組む学習

このことは、教育の不易の部分であり、ぜひすべての教師に目指してほしい学習である。人は誰もが自分を向上させたいという気持ちをもっている。ということはどの子どもたちも授業に参加したいという意識をもっているということである。このことを教師は意識してすべての子どもたちが授業に参加できるように、また参加できたと意識できるようにカウンセリング・マインドを持って、教材や資料を発掘してほしい。そして子どもたちの知的好奇心をくすぐった、どうしても解きたいと思えるような発問を創り、授業に臨んでほしい。さらに授業の中で、子どもたちが普段当たり前と思っていることを「おやっ!」と思わせる手立てを用意できるような教師になってほしい。

子どもたちが自分の思いや考えを持てる教師の手立てとしては、資料の精選が大切である。子どもたち全員が思いや考えをもちながらも、自分で気づいて知識として獲得していくことができる手助けとなる資料が必要になってくる。

最後に授業に参加しているとはどういうことか、確認しておく、手を挙げて発言することだけが参加しているということではなく、発言しなくても1時間を通して問題に向かって思考している状態を授業に参加しているということであると考えている。

(4) 教える学習と育てる学習

学習には、「教える学習」と「育てる学習」があると考えている。教える学習とは、教師主導の講義型であり、教科書で教える学習である。育てる学習とは、子どもも主体であり、教師は子どもたちの気づきを大切に、子どもたちの発言を中心に授業を組み立て、子どもたちが自

力で納得、理解していく学習である。これはすなわち討論のある問題解決的な学習である。

育てる学習では、教師は子どもたちが気づく助言や場の設定、資料の提供を行うので、子どもたちは主体的に、自分の意志を持って行動する。そのため教師が言わなくても今あるものを今よりも少しでも良くしようと努力する。しかし教える学習では、子どもたちは常に教師からの指示を待ち、自分の意志で行動しようとならないのである。

(5) 学習の仕方を教え、育てる学習

学習は何のために行うのか、知識・技能を教える学習も必要であるが、学習の仕方を教え、育てる学習も必要であると考えている。

人は常に自分に与えられた環境の中でもっとも良いものは何か、それが達成できるように問題解決しながら生きている。この問題解決の仕方を学習する必要がある。問題解決の仕方を知らないために、自分の意志では行動できず、人の指示がないと行動できない人が多くなったように思える。問題解決をしない人には進歩が少ないと考えている。自分の学習の仕方をもっている人は、常に前向きに考え、行動しようとする。すなわち **Doing** (不言実行) の精神の持ち主である。失敗しても立ち上がってまた努力する人である。このような人こそ、「社会力」のある人なのである。

学習の仕方を育てる学習とは、例えば中学校体育の目標に「心と体を一体ととらえ、運動や健康・安全についての理解と運動の合理的な実践を通して生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てる」とある。これは体育科が単なる技能の習得だけでないことを述べている。つまり、できるとかできないとか、うまいとかうまくないとかでなく、どうすると運動を楽しむことができるのか、問題解決をしながら運動の楽しみ方を学習するのである。これが学習の仕方を学習していることである。

また、学習の仕方を学ぶとはそれぞれの教科の見方・考え方を学習することと同じである

と考えている。社会科の歴史では、先人がそれぞれの社会を少しでも良くしようとするために、どのような考え方をして行動したのかを自分の問題としてとらえ、今後の自分の生活の中で、同じような場面に遭遇した時に、自分の考えをもって行動できるようにすることをねらっている。これは社会科としての見方・考え方であるとされている。それぞれの教科の見方・考え方をしっかり教師は理解して、授業を行うことが求められる。

5 総合的な学習の時間こそアクティブ・ラーニングを実施する教科である。

前述の「生きる力」と「学習指導要領総合的な学習の時間の目標」では、ほぼ同じ内容の目標が書かれており、生きる力の育成のためには総合的な学習の時間が大きな役割をもっていることがわかる。

また文部科学省初等中等教育局視学官の田村学氏のALを「子どもたちの思考が活性化し、真剣に課題に立ち向かっているような状況」ということから、総合的な学習の時間がもっともALを行いやすいこともわかる。

さらに社会科と総合的な学習の時間とは目標が似ていて、学習指導要領社会科の解説でも「問題解決的な学習を一層充実させ」という言葉がある。また、社会科の究極的な目標は「社会認識を育て、自ら考え正しく判断する力」を付ける学習であり、「社会認識の仕方」と「認識した社会をより豊かなものにしようとする行動する実践力」を目指して展開されるものである。社会科も行動する実践力を目指している教科でもあり、ALの展開が組みやすい教科でもあるが、時間的關係等により子どもたちの「ああしたい」「こうしたい」という思いで終わってしまい、なかなか実践まで至ることが難しい。その点、総合的な学習の時間は、子どもたちの「ああしたい」「こうしたい」を実際に現実にすることを単元計画に組み入れて、展開できる学習

である。

6 なぜ社会参加なのか？

社会参加をすることによって、子どもたちは達成感や充実感を味わい、自尊感情や自己肯定感、自己有用感が高めることができる。

社会参加するためには、子どもたちが現在の社会に起こっている事象等を自分の問題ととらえなければならない。そして社会の発展のためにはどうすれば良いかを考え、自分たちで問題を解決する手段を考え、実践するのである。

子どもたちにとって自分が考えたことが市役所の人に受け入れられ、それが市の施策として実際に行われることになったときには、本当に「まさか、自分の考えが」というのが本音であると思われる。しかし自分が社会のためになっているんだと感じ、自己有用感や自己肯定感が高まり、自分も社会の一員であると感じるのである。

茅ヶ崎市立小和田小学校中村俊太教諭の実践でも、工場を壊し、大きなマンションが建設され、その中の公園を自分たちで設計し、名前を考え、市役所の人や業者にプレゼンテーションをした。そして実際に自分たちの考えた名前が公園の名前として採用されたとき、本当に子どもたちは充実感と笑顔でいっぱいだった。一生自分たちの付けた名前が公園の名前として残るのである。なんと嬉しいことであろうか。ぜひこのような体験を多くの子どもたちに体験させる教師を育てたいと考えている。

社会参加したことによって、子どもたちは地域や社会を歩いているとき、車に乗っているとき、キョロキョロと周りを観まわし、今よりも少しでも良くできることはないのか、視野を広くもって観ることができるようになる。自分たちが言ったことが本当に行われ、社会のためになったと感じさせる。それは、子どもたちが自分たちも社会の一員であると意識し、社会の中を「社会力」と「感じる心」をもってキョロキョ

ロと観る「ビジョン」をもつことができるようになったということである。

7 総合的な学習の時間の教材

(1) 総合的な学習の時間における教材開発の仕方

子どもが社会参加する授業のためには、子どもたちが目を輝かせて取り組む教材の発掘が不可欠である。

実際にどのように教材を発掘するのか、まず「ひと・こと・もの」であり、さらに図1のように「子ども」「地域」「現代」の三角の中にあるものであると考えている。

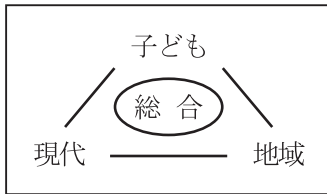


図1

特に地域については、今後明治維新の頃と同じ程度まで人口が減少することが予想されている。そういう社会の中では、地域の人と人のコミュニケーションが大きな役割を持つてくる。そのためにも子どもたちに地域を意識させ、つながりを持たせることは大事である。

また「社会参加できるもの」が良いと考えている。このためには教師は地域を歩くことが必要になってくる。なかなか職員室の中だけで良い教材を発掘することは難しい。

さらに、子どもたちが切実的・実感的な教材が良いと考えている。「子ども」「地域」「現代」の中に入っている教材であれば、子どもたちが実際に生活し、見たり知ったりしていることであり、必要なときに学校を出てフィールドワークすることができるので、より切実的・実感的に学習に取り組むことができると考えている。

(2) 教材開発のパターン

実際にどのように教材を設定するかは、次の

四つのパターンに分けられると考えている。

- ① 第一パターン：国際理解、情報、環境、福祉・健康等横断的・総合的課題
- ② 第二パターン：教科の発展としての総合的な学習の時間
・理科5年「流れる水のはたらき」から「〇〇川クリーン大作戦」
- ③ 第三パターン：教師の設定した教材から発展させる。
・〇〇地区を見学する。
- ④ 第四パターン：全く何もないところから子どもたちが探し出す。

このパターンは、予告等をして子どもたちに予め社会をしっかりと見つけさせ、人々が困っていること、問題等を発見させ、それを学級に持ち寄り、みんなで話し合っ決定していくことである。「今年の総合的な学習の時間は何をやろうか」と、教師が突然言ったその時間に子どもたちに決定させるのは、決して自主的子ども主体の授業ではないと考えている。

8 総合的な学習の時間の中で討論のある問題解決的な学習を展開させるための教師の役割

(1) 授業を開始する前に教師が行うこと

実際に独自のテーマによる総合的な学習の時間を創るということになったときに、教師はどのようなことを行えば良いのか、

当然のことであるが、まず教材を何にするかを決めることが初めである。教師にとってこのことがもっとも難しいのかもしれない。

教材を見つけるためには、まず地区等をフィールドワークすることである。それは地域、学区を何か良い教材はないかと感ずる心をもって歩いて、観て、知ることである。教材は学校の中だけではなかなか見つからない。ぜひ職員室から飛び出して学区を歩いてほしい。

教材が決定したら以下の計画を立てたい。

- ① ゴール(大まかにどんな社会参加をするか)

を決める

- ② ゴールに向かうための全体の流れを決める
(大まかな単元計画)

一時間毎の流れを決める=時間数を決める

- ③ 活用できる人材の計画を立てる

(2) 教師は授業進行のファシリテーター

実際にどのような総合的な学習の時間の単元計画を作成するか、教師は授業進行のファシリテーターである。そのために子どもたちの反応を予想し、全体の流れを考える。

授業の主体は子どもだからと、子どもたちに勝手に行わせるのは、自主的な学習ではない。教師は、あたかも子どもたちが自分たちで行っているかのように、予め様々なことを考えたり、予想したりして仕組んでおく必要がある。

ファシリテーションとは、人の成長や可能性を信じて、学び合う場を創ることである。そしてそのプロセスを管理する人をファシリテーターと言う。このことから教師は学習のファシリテーターであり、子どもたちを信じて、子どもたちの学び合いの場を設定することが重要な役割を持っている。調べ学習と称して何でも子どもたちに本やインターネットで自由に調べさせ、新聞や模造紙に書かせる学習は、本来の調べ学習ではないと考えている。

討論のある問題解決的な授業の中では、子どもたちが気づいていなかったり、もっと思考を深めたかったりするときに教師は「気づかせる・知らせる・指導する」の順で関わるようにしたい。初めから教えるのではなく、初めは子どもたちが気づく発問や助言を提示するのである。それでも気づかなければ知らせる、指導する、の順で対応していくと良いと考えている。

9 子どもが社会参加する討論のある問題解決的学習の主な展開例

(25～30時間計画)

テーマ「〇〇地区の自然を守ろう！」

- ① 教材との出会い 2～3時間

方法1：一度その場所へ行って体験したり、見学したりする。

方法2：資料やグラフを見る。

○見学時等に子どもたちに持たせたい視点

- ・良くないと思うことはないか
- ・人々が困っていることはないか
- ・問題はないか
- ・こうすると良いということはないか

- ② 感想を書く(関心や疑問を芽生えさせる)

1時間

※できれば見学したその日に書かせたい。

○感想の内容 ・わかったこと・思ったこと
・気づいたこと ・疑問に思ったこと

○自分が調べたい問題をつくり、なぜその問題にしたか理由を考える。

- ③ 問題設定とテーマ決定(個の問題を持つ)

1～2時間

感想をもとに学級で、自分はどの問題をなぜ調べたいか学級全体で話し合っ決定する。

○問題が決まったら必ずテーマを決める。

例) 問題：〇〇地域を守るためには、何をすればよいか？

テーマ：〇〇の自然を守ろう！

- ④ 問題について予想し、発表する

※発表のみ。討論等はしない。 1時間

問題を解決するためにはどうすればよいか、自分の予想を見つける。

例) 〇〇の自然を守るためには、私たちは何をすればよいか？

※予想等を書くときには必ず理由も書かせるようにする。

- ⑤ 学習の計画を立てる 1～2時間

問題を解決するためには、何を行えば良いのか、個で考え、発表しながら、全体の学習の計画を立てる。

- ⑥ 問題解決のための根拠収集

※個人、グループ、全体で自分たちの考えを創るための情報を収集する。

<基本的知識収集>

- イ. 絶滅危惧種について調べる。 1時間
- ロ. 他の地域では、どのような運動が行われているのか調べる。 1時間
- ハ. ○○市の開発の様子を調べる。 1時間
- ⑦ より切実実感的にするための話し合い
- イ. 問題がどのような理由や背景から起こっているのか、論理的に究明していく。

原因の探究

1時間

例) なぜ絶滅危惧種になったのか?

資料: 地形図

- ロ. 人々の願いにせまり自分の願いに気づく。

願い・価値の究明

1時間

例) ○市としてはどうしたいのか?

絶滅するとどうなるのか?

資料: 市役所の人の話を聞く

- ハ. 問題に直接かかわりその問題の渦中にいる人々の気持ちを考える。

心情への共感

1時間

例) 地域の古老に昔の様子を聞く。クツワムシ、ヘビ、日本赤ガエルについて

動物たちはどうしているのか? 熊の出没について話し合う。

- ニ. 知識・価値を関連づけながら、問題を解決するためには、自分がどのような行為をとれば良いか、意志を決定する

合理的意志決定

1時間

- ・看板を立てる→却って知らせることになり、絶滅するのではないか?
- ・清掃をする。→環境に悪いごみがあった。
- ・保護者、地域に訴える。

※はじめに問題解決のためにできる多様な方法をできるだけ多く挙げ、長所と短所や実施した場合の影響や結果等から自分の価値

等から最善の解決方法を選んでいく。

- ⑧ 問題解決のための自分たちの考えを創る。(個の問題を共通の問題に練り上げていく) 2時間

自分で考えた問題解決方法をグループで検討し、グループの考えを決める。

- ⑨ グループ毎プレゼンテーション準備をする。 2~4時間

- ⑩ プレゼンテーション 2時間

地域、市役所等関係者を招いて発表する。

- ⑪ 学級全体で検討 2時間

子どもたちの気持ちや感情(情意的・シンキング)だけでなく、客観的な事実(クリティカル・シンキング)から思考させ、判断させたい。

◇クリティカル・シンキング

物事を多角的・多面的に吟味し見定めていく力 → 協働的問題解決

◇情意的・シンキング (fair will thinking)

- ⑫ 実行=社会参加のための準備 2時間
- ⑬ 実行する=社会参加する 2時間
- ⑭ 振り返る 感想を書く 1時間
- ⑮ 新たな問題をもつ 1時間

10 実践例

実践 茅ヶ崎市立小和田小学校中村俊太教諭

(1) テーマ:「自転車天国?茅ヶ崎」

(2) 実践の概要

茅ヶ崎市は、自転車事故の割合が県内3位と自転車事故多発地域に指定されている。また学区内にある東小和田交差点から辻堂駅までの道は、朝通勤の自転車が信号無視や右側通行等危険な運転が目立っていることなどを知らせ、どうすれば自転車が左側を走るようになるかを考えた。その結果プリントを作成したり、横断幕を作成したりして朝通勤時間帯の通行する人に自転車左側キャンペーンを東小和田交差点で実施し、市役所、警察、地域自治会とともに呼びかけた。

(3) 単元計画

- ① 安全なくらしとまちづくり【社会科】
…問題場面の発見
- ② 茅ヶ崎市は自転車事故多発地域に指定されている！（5時間） …願い・価値の究明
- ③ 自転車のルールはいったいどうなっているんだらう？ …原因の探究
- ④ 自転車に関わる事故をなくすためにはどうすればいいだらう？（4時間）
…合理的意思決定
- ⑤ 飯塚さんの話を聞いて、思ったことや感じたことを整理しよう！（4時間）…原因の探究、心情への共感、願い・価値の究明
- ⑥ 小和田小学区の自転車交通をもっとよくするために、自分たちに何ができるのか。（4時間） …合理的意思決定
- ⑦ 自分にできることを実行する準備をしよう！（11時間） …社会参加
- ⑧ 振り返り（3時間）

11 おわりに

文部科学省は、問題解決的な学習の展開のある授業を以前から教師に求めている。しかし教育現場では、なかなか問題解決的な学習が展開されていない。また、できる教師も少ない。

総合的な学習の時間は、我が国の子どもたちを教育する上で、とても重要なものであるにも関わらず、ほとんどの学校では行事の準備等に充てられたり、間違った解釈による総合的な学習が展開されたりしていることが多く見られる。

本稿では、問題解決的な学習はどのような学習か、また総合的な学習の時間はどのような学習の時間かを明確にした。

今後、問題解決的な学習や本来の総合的な学習の時間が実践されるよう願っている。

【参考文献】

1. 今谷順重『中学校社会科 新しい問題解決学習の授業展開』P31~53 ミネルヴァ書房 1991年
2. 研究代表者高口努『資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究報告1』～使って育てて21世紀を生き抜くための資質・能力～ 国立教育政策所2015年3月
3. 『総合教育技術』P6~32 小学館2016年8月
4. 教育課程企画特別部会『論点整理』2015年8月
5. 田村学『学校とICT学習指導要領改訂の方向性とアクティブ・ラーニング』Sky株式会社 2015年12月18日
6. 文部科学省『すぐにわかる新しい指導要領のポイント』2012年
7. 文部科学省『小学校学習指導要領』2008年3月
8. 中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」2011年1月31日
9. 文部科学省「教育課程部会小学校部会第7回 資料1」2016年6月23日